
破壊系天使サクラが通ります。消されますよ？

夢衣式

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

破壊系天使サクラが通ります。消されますよ？

【Nコード】

N4217Y

【作者名】

夢衣式

【あらすじ】

天使が世界を滅ぼす！？

敵は 天使 ∞ 、悪魔 ∞ 、執行人 ∞ 。

この大多数の敵を倒すのは

天使と凡人の合計二人！？

一般人だった俺は生きて行けるのかよ！？

破壊系天使サクラ

一般人の博の^{ヒロイン}X

消耗の増殖系ドタバタファンタジー

第一話 破壊系天使現る！

俺の名前は長瀨博^{ナガフチヒロシ}

どこにでもいる普通の高校生。

辺りはいつの間にか春に染まり、始業式も昨日終わって高校二年になつていた。

「一年は早いな…」

そんなことを思いながら歩いて、教室に着く。

「おはよ！長瀨！」

こいつは広瀬誠^{ヒロセマコト}、中学からずっと同級生。

「今年も一緒だな！」

「腐る程聞いたよ…」

ホームルームが終ってから、誠が急いで寄って来た。

「また原因不明の火災だつてよ。」

携帯のワンセグを見せて来る。

最近、この地域だけ火災が多い。

「サクラちゃんも大変だな。今日も来るかな？」

と、誠が言う。

『サクラ』とは最近、この地域に事件がある時、必ずと言っていいほど現れる、鳥を抱えた謎の少女。

「いいなあ、俺もあんな美少女に助けられたい！」

……ここまで来ると変態だな…

『で、出ました！サクラです！今、子供を救助しました。』

ワンセグからリポーターが叫ぶ。

サクラは一瞬にして助け、一瞬にして消える。

「全く、大人は何をしてるんだ！こんな少女に救助を任せっきりだ

なんて！」

誠はそう言うが、俺もそう思う。
ただ見ているだけだなんて…

何事も無く授業が終わり、学校から帰る。

サクラを見たいが為にずっとワンセグを見ていた誠が言うには、あの後は火災は無かったようだ。平和でなによりだ。

帰り道。俺の家の近くから煙が出ていた。人だかりができていて、朝のリポーターもいる。

「さあ、今夜も現われるのでしょうか!？」

会えるのは最初で最後かもしれない。一応、見届けよう。

空から変な音がしたので空を見る。

すると、あの…サクラがいた。空中から駆け降りて来る。
人間技じゃない。

「今夜も出ました!」

いつの間にか彼女は、老婦人を抱えて俺らの前にいた。
そこにリポーターが駆け寄る。

「今夜もお手柄ですね!一言どうぞ!」

「邪魔。ウザい。黙れ。消すわよ!」

…随分と御立腹だな。まあ、そりゃそうだろう。
いつも彼女の近くににいる鳥がリポーターを襲う。

もう、サクラの姿は無かった。

それに気付いた時には鳥もいない。

桜の花びらを残して――

これがサクラか……
噂どりの速さ。

家に帰ると、さっきのテレビがやっていた。
カップラーメンを食べながらそれを見る。
やはり、消える瞬間が映って無い。

サクラ……

彼女は一体何者なんだ！？

――翌日――

「ただいま。」
「お帰りなさい。」

今日は散々だった。

――朝――

「おい！昨日の、長渕の家の近くだっただろ？何か教えてくれよ！」
「お前が見たテレビどうり、恐ろしい奴だよ。」

空から現われるし、

消すって言っし…

「それ以外にだよ！」

必死にしがみついて来る。

しつこいな…何も無いのに。

「空から現われるだなんて…きつと天使なんだ。ああ、早く俺の元に舞降りてくれ…」

昼休みにはこんな事をずっと聞かされるし――

――帰り道――

俺の家へ帰る途中、急に辺りがシンと静まる。

ざわざわと歩いていた人も、車も、鳥も、虫も…

生き物という生き物がいなくなった。

俺以外

『ドンッ』

つと、大きな地鳴りが聞こえ、地面が揺れる。

揺れが大きく、俺は倒れた。

揺れが収まったので、音のした方を見る。

視線の先には…

亀。

普通の亀では無い。十数メートル先に五メートルもある巨大亀がいる。

体は腐敗していて目がくぼみ、虫が集っている。背中にはこれまた巨大な大木が宿っている。

とても見れた物じゃない。

グロテスクなので、

『亀さん』

と呼ぶ事にしよう。

亀さんは俺に向かって歩いて来る。

流石は亀さん、足が遅い。これなら逃げられる！

走る。より遠く、人のいる方へ。

「助けて下さい！」

忘れてた！誰もいない。

亀さんの攻撃♪

…。

腕が地面を削って飛んで来た。俺はそれを危機一髪で避ける。

可愛く言ってるけど、ふざけている訳じゃない！俺には命が懸かっている。

亀はその後、空高く跳び上がり、俺の真後ろにやって来た。その揺れで俺はまた倒れる。

「もう終わりだ。ああ、あれもしたかった。これもしたかった。」
ぶつぶつ言っているが、なかなか奴が来ない。どういう事だ？

俺は神社の鳥居の内側にいた。つまり、境内の中。奴は鳥居の外から動かない。

「入って来れないのか…？」
「やった…助かった。」

バリバリッ

嫌な音がする。

気付けば、亀がゆっくり入って来る。
嘘！？やっぱり駄目なの！？

サクラ！いるなら助けてくれ！

「いるわよ？」

「いるのかよ！？」

目の前にはサクラが仁王立ちしていた。

「あの…パンツ見えて…」

「黙れ変態！消すわよ！」

彼女は本気で怒った後、手を上に上げる。

「どうやって殺すんだよ？」

「壊せば良んじゃない？」

そう言った後、空から雨のように降り注ぐ火の玉。

「おい！俺に当たるって！」

「うるさいわね！死ぬ気で避けなさいよ！」

怯んだ亀を、サクラは蹴り飛ばす。

亀は黒い小さな塊となって、地面へ吸い込まれて行った…。

「アイツらは神社に入るのに時間が掛かるようね。」

「死んだのか？」

「地球に戻っただけよ。また来るわ。」

「アイツは何なんだ！？」

サクラはもういなかった。

くそ…逃げられた。

分からない事だらけだ。

そんな感じで無事、生きて帰ってきた。

…。

ん？

何かがおかしい。思い出せ！

帰ってきた時に戻って見よう。翌日になった時…

『ただいま。』

『お帰りなさい。』

ここだ！

俺は一人暮らしなんだ。

部屋のリビングに急ぐ。あんなに散らかっていた部屋が、ごみ一つ無い。

「晩ご飯出来てるわよ。覚めないうちに食べなさい。」

おい！おい！おい！

何でサクラがここに！？

「何でここにいるんだ！」

「あんたを助けたじゃない！家無いから泊めて。」

何でそうなる。

「どうして俺の家なんだ。それと、ここにあつた大量のゴミはどうした？」

「カップラーメンとかでしょ？空気にしたわよ。」

…空気に…。

「アイツは一体何なんだ？」

「あんた、協力してくれない？天使探しに。」
俺の話は無視か。

天使探し…

「何人いるんだ？」

「知らないわよ！でも、今回の火災が天使の仕業の可能性が高いわ。」

「何で天使が放火してんだよ。」

「長が殺されてみんな力の制御が出来なくなったの。」
要約すると

天使が世界を滅ぼす。

恐ろしい事になったな。

「でも、引つ掛かるのはあんたよ。『執行人』に消されそうになる
何て…」

「アイツの事を詳しく教えてくれ！」

「執行人は、簡単に言つと地球からの使者。存在がありえ無かつた
りすると消しに来るわ。」

「あとは？」

「それだけよ。でも、問題はあんたが何故、ありえ無い存在となつ
ているのか。」

確かに…俺に殺される理由は無いはずだ。

「明日の夜は放火魔を探して天使に戻すわよ。それじゃ、お休み。」

「俺はどこで寝ればいいんだ！」

サクラの作った夕食を急いで食べる。意外とおいしい。

「私の隣で寝れば？」

「そんな事できるか！」

明日から壮絶な日々が始まりそうだな…。

第一話
完

第二話 着火系放火天使

あれが夢だったら良かったのに…

学校を終え、家へ帰る。

誠からカラオケの誘いがあったが、先約があるので断った。
サクラとの待ち合わせ場所に急ぐ。

と、言っても待ち合わせ場所は俺の家。

「ただいま」

「遅いわよ！何時間待たせる気だったのよ！」

サクラは飛びかって来る。

「仕方ないだろ、学校があるんだから。」

「へえ学校ね…」

変な事考えんなよ？

「それはともかく、早く探しましょう。いつ現れるか分からないから。」

「どうやって探すんだ？」

「決まってるじゃない！あんたが全力で走って、私が空から探す。」
何処にいるかもわからないのに…

あれから何分走ったんだ？

手掛かりは何も無い。今日は来ないんじゃないか？

『ヒロシ！聞こえる？』

不意に、サクラの声が頭の中に聞こえて来る。

「聞こえるけど…一体どう…」

『そんな事言ってる場合じゃ無いわ。早く学校に来て！』

俺は全力疾走で向かい、五分程で着いた。サクラがいる。

「ほら、見て。」

視線の先には同じ年くらいの少女がいた。

「あれが放火の犯人なのか？」

「ええ、今度はこの学校を燃やすようね…」

「早く止めよう！」

「あんたはここで待っていて、手に負える奴じゃないわ。」

そう言っていきなり攻撃を仕掛ける。

こんな所で暴れたらまずいんじゃないか…

辺りはあの時のように人がいなくなった。

サクラが攻撃を仕掛けるが、少女は一步も動かない。

「ヒロシ！早くそこから離れて！」

俺の所まで巨大な魔法陣があった、十メートルくらい下がった途端、爆発的に炎上した。

サクラがいた所も、少女がいた所も吹き上がった炎に飲まれる。

「サクラ！」

サクラは倒れていた。少女は一步も動かない。

突然、サクラが言う。

「執行人に追われたあんたなら、出来るかも知れないわ。」

「な、何を…？」

『私だけではこの能力は使えないわ。ヒロシ、私を使って。』

彼女が光った後、骨組みの羽のようになる。中心には穴が開いていて、一つだけ緑色の珠がはめ込まれている。

『さあ、願って。あなたが使う武器を…』

武器…急に言われても…

羽の真ん中から俺に向かって刀が飛んで来て、それを取る。これなら…

「うおー！」

俺は少女の所まで走る。その間、炎を飛ばして来る。

「負けたわ。」

少女はそう言った。

「天使に戻れ！」

そう言つて、少女を斬る。少女の姿が消えた。
これで、天使に戻ったんだな？

「サクラ！」

さっきの所に、サクラは倒れていた。

「やったわね…。」

彼女を抱えて家に帰る。

「奴が覚醒していなくて良かったわ。」

「あの少女はどうなったんだ？」

「光に戻ったわ。でも、生きてる。」

「さっきの奴は何故あんなにすごい炎を出せたんだ？」

「天使には能力があるの。私は消す能力『零』。でも、まだ最大限まで能力を発揮出来ないわ。」

「長が死んで天使達が暴れ回るつてのに、サクラは大丈夫なのか？」

「私は長が死んだ後、変わりに長になったから私は暴れたりしないわ。」

なら安心だ。

「…と言う事はあの少女は仲間になった訳だ。」

「まだ後何十人も相手にしなきゃいけないわ。」

どこまで生きれるかな…俺。

第二話
完

第三話 破壊系転校生

「えー、今日から我が校に転校して来た転入生を紹介します。」

「こんな時期に？」

「始業式が終わったばかりよね？」

「女子かな？」

色んな意見が聞こえるが、俺は興味が無い。

「博、俺の美少女リーダーが壊れそうだ！」

「お前のなんか当てにしてないよ。」

MAXが教室に呼び込む。

ちなみにMAXは、

体力MAX

スタミナMAX

全てにおいてMAX

どんな事でも全力でとり組む為、そう言われているこのクラスの担任。

「では入れ。」

「「女子だ！」「」」

扉が開いた途端、男子が叫ぶ。

「超美少女じゃね？」

「すげー可愛い。」

「どっかで見た事ない？」

などと聞こえる。
俺に興味は無い。

「皆さん、初めまして。春舞サクラ（ハルマサクラ）と言います。
よろしく願います。」

！！！！？

「サクラ！？」

俺は驚いて立ち上がった。見ると、本当にサクラだった。

「「「あっ！」「」」

みんな一斉に気付く。

「えー、ではサクラ君。開いている席に座りたまえ。」

「博の隣が良い。」

そう言っただけの席の隣に座る。

「皆さん、これから一年間仲良くするように。以上、ホームルーム
終わり。」

ホームルームが終ってから、みんなが集まって来る。

「サクラさん、何でここに？」

「どうしてこんな時期に来たの？」

「こんな学校で良いの？」

すると、珍しく誠が止めに入る。

「みんな、止める。サクラさんが困ってるだろ。それより問題は、
なぜ博の事を知っているかだ！」

そこに持つて行くか誠！

今度はみんなの質問責め。恨むぞ誠。

何とか逃げ切り、サクラの手を引っ張って踊り場の方へ行く。

「何でお前がいるんだ。」

「あんたを守る為よ。執行人に狙われるなら、何か理由があるはずよ。心当たりは無いんでしょ？でも、私の能力を使えるって事は何かあるのよ。」

それだけなのか？

「執行人が活動するのは日が沈む十数分前よ。だからと言って安心しないでね。」

「それだけが目的じゃ無いんだろ？」

「当たり前でしょ。もしかしたら天使が紛れ込んでるかもしれないと思っただけ。」

そう言う事が…

「だからあんたも協力してね。天使が覚醒する前に。」
協力しろと言われても…

「目印とかないのか？」

「あるわ、碧い石のネックレス。それをしている人を探して。」
そして、そのネックレスを見せてくる。

…どっかで見た事があるような…。

「覚醒と違って何度も言ってるが、そうなるかどうか？」

「どんな物も見境無く、能力で破壊するわ。」

恐ろし過ぎる。

もし、この前の天使が覚醒してたら…

早く他の天使を探さないと。

「私は怪しいのを探すわ。博はネックレスをしている人を探して、見つけたら呼んで。」

そうして二人は至る所を探し回った。

第四話 暗黒系影天使

休み時間の間、二人で探し回った。

手掛かり無し。

「いないわね…」

「一日無駄だった気がする…今日は終わりにして明日にしよう。」
「そうね。帰りましょう。」

「どうしたのお二人さん。疲れた顔しちゃって。」

夜海^{ヨミ}さん。

生徒会長が話しかけて来る。

「いや、何でもないです。」

「何でも無いのなら早く帰りなさい。じゃあね、長渕君。それと転校生さん。」

夜海さんが翻った時見えたのが、あのネックレスのように見えた。
気のせいだろう。

疲れてたから…

「ヒロシ、何かおかしいわ。」

いきなりサクラが言う。

「特に変わりは無いと思うが…」

「屋上へ行きましょう。」

そう言って、俺の手を引っ張る。

屋上に着いて外の風景を眺める。

特に異常は無いようだが…

「思い違いじゃないか？」

「うーん、何か違うのよねえ。いつもと…」

別に変わりは無さそうだが…

外にいる夜海さんと不意に目が合う。不敵な笑みを浮かべ、いなくなつた。

「あゝ！！！」

急にサクラが叫ぶ。

「どうしよう、もうすぐ手に負えなくなるわ。どうして今まで気付かなかつたんだろう…」

「何だよ、急に叫ぶなよ…」

「ほら、見てよ。気付かない？」

俺は周囲を見渡す。

下校中の生徒。

歩行者。

車。

部活中の生徒…

特に異常は無い。

「別に何も無いじゃないか。」

「ヒロシって、本っ当鈍感よね。消したいわ。」

どこがおかしいって言うんだ？

そう思った時、サクラが言う。

「影よ。」

影？

…気付けば、何処にも影が無い。

下校中の生徒…

歩行者…

車…

部活中の生徒…

「本当だ…影が無い…」

俺のも…

サクラのも…

「早く主を探さないと！みんな影に飲み込まれる事になるわよ！」
「主を探すって言っても、一体どう…」

夜海さんの不敵な笑みを思い出す。

そっいえば、夜海さんには影があったような…

ネックレス…

「心当たりはないの？」

「…夜海さん…?」

そう言った途端、サクラが走り出す。俺もサクラについて行く。

「一体どこに向かう気だ?」

「分からないわ、生徒会長を探して。」

二手に別れて探し回る。

夜海さんは学校の中に入るのを見ているので、学校の何処かに必ずいるはずだ。

『ヒロシ、いた?』

サクラが頭の中にまた話しかけてくる。

「いや、見つからない。」

『夜明けまでに探さないと、影に飲まれたまま、日が一生昇らないわよ。』

大変だ!一刻も早く探さないと…

そして、図書室に入る。

ここにもいないか…

そう思った時、

「待っていたわよ。」

夜海さんだ。

「サクラ!いたぞ!」

言った途端、サクラが来る。

「やはり、あなただったのね?」

「もうすぐ世界は闇に飲まれ、私の物になるわ。それをお二人に眺

めさせてあげようと思ってね…」

飲まれる前に、早く戻さないと！

『ヒロシ、私を使つて。』

そして俺はサクラから刀を取る。

「あなたを天使に戻します。」

「さあて、出来るかしらね？ やつてご覧なさい。」

俺は夜海さんに斬りかかった。

斬った…だが、夜海さんは切れて無い。

「どういう…事だ？」

「その刀で何でも斬れると思ったたら大間違いよ。外を見なさい。」

気付けば、もう夜になっていた。

外にいた部活の生徒はとくに帰り、グラウンドは闇に飲まれていた。

夜海さんはグラウンドに飛び降りる。

「闇は全て私の物。その刀じゃ、斬れないわ。」

「どうする、サクラ…」

『刀で斬れないんじゃない…どうしようも……あ、見て。』

グラウンドを見ると、夜海さんを中心にグラウンドをうめ尽す巨大な魔法陣があった。

「なんだ、これは…？」

夜海さんが驚く。

「ようやく俺の出番が来たようだな。」

聞き覚えのある声。

「閉^{ヘキ}！」

その女がそう言った途端、魔法陣の円周から火柱が立つ。

「お…お前は…」

そこにいたのは

俺が斬った放火魔天使。

「待たせたな。転生に時間がかかった。さあ、早く奴を斬れ。」

「斬れって言われても…」

『あんた馬鹿？火に本体が囲まれてるなら、もう逃げ場は無いわ。』
そ…そうか！

「夜海さん、すみません！」

俺は火柱に入り込み、斬りかかる。

「フツ…ここまでね。」

そう言って夜海さんは消えた。

第四話 完

第五話 漆黒系闇天使！？

「危ない所だったな…感謝しろよ？」

「あ、ありがとうございます。」

「お前…不思議な力があるんだな。『零』の能力を長と力を合わせて発揮出来るなんて…」

「どう言う事ですか？」

「『零』は一人しか持つていない能力。『火・影・風・水・雷』であればどんな天使でも弱いが使える。俺や夜海のようにそれが能力の場合もある。でも、『零』に触れる事なんて出来ない。だが、お前は能力の刀に触れる事が出来る。お前が執行人に狙われる理由はそれかな。」

「いまいち良く分からないが、もしかしたら俺は一般人では無いかもしれない。」

「という事だろう。」

「天使に戻れて良かったわね。」

「ああ、ありがとう。あのまま暴走していたら間違いなく覚醒していただろう…おっと、自己紹介を忘れていた。俺は『お紅』と呼んで頂くと助かる。」

「お紅さん…宜しく願います。」

「敬語は嫌いだ。」

「いきなり気分を害したらしい…」

「おかしいわ…」

「またそれが…」

「さつき『影』は戻しただろ？」

「いや、私も同感だ。何かが通常では無い。」

夜海さんの言葉を思い出す。

『もうすぐ世界は闇に飲まれ…』

『闇は全て私の物…』

闇は、果たして夜海さんの能力なのだろうか？

「闇？」

俺は思わず声に出す。

「月が昇って無いわ…」

「『影』の他に『闇』がいたのかも知れないな。」

「早く探しましょう。まだ明日、太陽が昇る訳じゃ無さそうだからね。」

「よし！サクラは町全体を、ヒロシは学校、私は空を探す。見つけたら呼び合おう。」

そうして別れて探す。

暗い学校の中。

非常口の薄暗い明かりを頼りに探し回る。

当たり前だろうが人には合わない。

もし、会ったとしたら

それは天使だろう。

「何だ？」

俺は白く輝く小さな珠を見つけた。

「飴か？」

ハツカ飴の様だが違う。輝いている。

「一応持つとくか…」

そしてまた、走り出す。

『闇』…一体どこに隠れているんだ。

『グルル…』

と、不気味な声が聞こえる。

非常口の薄暗い明かりで照らされたその姿は、まるでエイリアンの様だった。

こいつは…『闇』じゃない！執行人だ！

『グオオオ』

気付いた時には、襲いかかってきている。
全力疾走で逃げ、撒いた様だ。

「ここは一年の教室か…」

一応の為入って見ると、女子がいた。

「どうしたんですか？」

話しかけて来た。

「お前こそ何してる。」

「わ…分からないんです。」

…こいつが『闇』だな…

そうして校庭に連れて行く。

『見つけたぞ。多分…』

心の中で言う。

『今すぐ行く。』

お紅さんの声がする。

「そいつが闇か…ネックレスを持っているから天使には間違いないな。」

「な…何なんですか？あなた達、天使が何とかって…」

戸惑っているが、我慢してもらおう。

「お紅さんじゃあ戻せないのか？」

「『零』じゃないと戻せないんだよ。今はサクラが来るのを待とう。」

」

「待たせたわね。」

何処からともなく現われる。

「さあ、斬りましょう。」

簡単に言うが、気付いて無い人に斬りかかるのは…

「火柱出すから…」

そう言つて、魔法陣を出す。

「少しの間、目をつむってください」

火柱が立つ

そして、斬った。

斬ったが、斬れて無い…

「どういう事だよ？」

この人は違ったのか？

『グオオオ』

と、またあの声がして襲いかかって来た。

「長、能力は!？」

「私はまだ出来ないわ。雷と水、風が無いから…」

「仕方ねえ、セカンドモード！」

紅い火の様な羽が四枚はえる。

「燃え尽きる…」

執行人のその下にある魔法陣から、青い炎が吹き出す。

「これが…お紅さんの能力…」

「俺達は能力を制御するためにモードがあるんだ。今は、たかが二番目…」

『グルル』

まだ生きている。

闇に身を潜めて…

そして、一年の子に飛びかかって来た！

「やめろ！」

そう言った途端、俺は光に包まれた。

第五話 完

第六話 続・漆黒系闇天使

光に包まれたのは一瞬で、気が付くと真っ暗な場所にいた。
「ここは…」

魔法陣があり、俺の足元には

『長』

と、文字で書いてある。

良く見れば、魔法陣は二重になっていて、内側の魔法陣には

『炎』

『影』

これも文字で書いてある。

すると、ポケットに入れていたあの白い珠が突然輝き出し、外側の魔法陣の文字になる。

『光』

そうか、『闇』を斬れないのは『光』が照らして無かったからか！

今は光がある！

そして光の文字に触れる。
刀が光で満ち溢れる。

「やめろオ！」

執行人に斬り込んだ。

そして地球に戻って行った。

「お前…長の力を…」

「私の能力をこじ開けるなんて…」
一年生の人はとっくに気絶していた。

「天使に戻します。」

そう言つて俺は『闇』を斬った。

「長有能力つて言つてるけど、一体何なんだ？教えてくれ。」

俺は…一般人じゃ無いのか？

「前にも説明したように天使に戻す事も出来る、消す力『零』。そして、もう一つの能力が『全』。全ての能力の内、どれか一つを一定時間使う事が出来るんだ。だが、『五大元素』。つまり『炎』・『闇』・『風』・『雷』・『水』が揃つてからじゃ無いと『全』は発動出来ないはず…。」

「ヒロシは良く分らないわ。人間なのに能力を使うし…」

「何だか良く分らないが、つまりその五大元素を天使にすれば、残りは捕まえやすくなるって事だろ？」

「そう言う事になるな。」

仕方ない、明日も全力で探し回るか…。
今思ったが、俺にプラスがあるのだろうか？

「はろー」

聞き覚えの無い声が聞こえてきた。

「凄いなえ、執行人をたかだか人間が追っ払うだなんてー！」

見た事が無い人だ。

背中には蝙蝠の羽のようなものが付いている。こいつも天使なのだろうか？

「ヒロシ！下がっている。こいつは悪魔だ！セカンドモード！」
お紅さんが声を張り上げた後、攻撃をする。

「サード…」

悪魔が呟くと、あの青い炎が悪魔の体を避けて行く。

「なあゝんか、期待外れ。五大元素の一人が戻ったって聞いたのに…
…また今度遊ぼうと。」

その瞬間、いつの間にか俺の隣りにいた。

「次は君かもよ？」

振り返ると、もういなかった。

「まずいな…天使が暴走している事が悪魔にバレてる。」

「それはまずい事なのか？」

すると、サクラが話し出す。

「元の長は魔界の『零』の能力者に消されたのよ。あいつに勝つには強力な『零』の能力が必要なの。でも、唯一勝てる能力者だった長は消されてしまったわ…」

「それじゃ…天使集め何かしても意味無いんじゃないか！」
「だからよ！」

打ち消すようにサクラが言う。

「その中に長が混ざっていないか探しているのよ！…」
サクラが泣きそうになる。

「ご…ごめん…」

「きつと…生きているわ、お姉ちゃん…」

サクラはそうつぶやいた。

第七話 記憶（幻系慰め天使）

『…ラ……サクラ…！』

『お姉ちゃん！待ってよ！』

『フツ…サクラ。お姉ちゃんの話、ちゃんと聞く事できる？』

『うん！』

『少しの間、会えなくなるかも知れないけど、それでも我慢出来る？』

『出来るよ！』

『サクラが良い子で良かったわ。このネックレス、私だと思って大切にね。』

『良いの？』

『ええ、勿論。』

『ありがとう、お姉ちゃん!』

『また今度、会いましょう。』

そう言つて、何処か遠くへいなくなっていく。

待つて…待つてよ!

行かないで!

お姉ちゃんが天使だったなんて、知らなかった。

知つてたら止められていた。

あの時ネックレスを渡したという事は、死ぬ事が分かっていたんだよね?

私も死んでしまっただけ、

また今度会うつて約束したよね…？

いつか、また会えるよね？

この世界の何処かに

必ずいるよね？

見つかるまで、私は探し続けるわ。

あなたが例え、覚えて無くとも…

…

「ここは…何処？」

「サクラ…良く待っていてくれたわね。ありがとう。」

「本当に…お姉ちゃんなの？」

「ええ、そうよ。サクラ…」

「お姉ちゃん…会いたかった…」

「心配させてごめんね。でも、これからずっと一緒だよ。」

「本当に？」

「ずっと、ずっと。」

お姉ちゃんと…ずっと一緒に…

お姉ちゃんが抱き寄せて来る。

暖かい…

「お姉ちゃん…」

「なあに？」

「嘘でしょ？」

「サクラ？何を言ってるの？私はここよ？」

お姉ちゃんは死んだ。

「あなた…『幻』でしょ？」

「…。」

「化けるなら…もっと上手に化けて欲しかったなあ。」

「やっぱり駄目ね…」

『幻』は、微笑んでそう言った。

「でも、私の為に慰めてくれてありがとう。」

『幻』は珠になり、消えた。

本当にありがとう…

「サクラ？」

「な…何よ？」

「随分とうなだれてたけど、大丈夫か？」

「べ…別に…」

なら良いんだけど
さっさと探さないと。

「さあ、今日も探すぞ。まだ四人しか戻してないんだからな…」

「五人よ…」

…五人？

俺が知らない内に戻したのか？

サクラはベッドで寝てたと思ってたが…

第七話 完

第八話 反射系可視光線天使

今日は休日。

大量に戻す、一週間に一度のチャンスだ。

「とは言っても…」

休みたいんだけどなあ…

執行人は待つてくれないし…

「早く探すわよ！」

「何処を？」

今まで寝てたくせに…

「『鏡』よ」

「『鏡』！？もう居場所が分かってるのか？」

「何言つてんの？あんた一度会ってるわよ？」

先に言ってくれよ…

！？

俺、いつ会った？

「会った覚えなんて無いぞ？」

「本っ当鈍感よね。私とヒロシが初めて会ったのは、亀に憑いた執行人の時よ。」

「という事は…火事の現場にいたのは誰だ？」

「だから！！『鏡』よ！人助けをしてたから戻さないでいたけど、そろそろ戻さないと。」

「…今思ったが、戻された天使はどこに行くんだ？」
「珠になって封印されるわ。昨日、『炎』がいたのは私が封印を解いたから。」

という事は、封印した後からでも『鏡』は人助け出来た…

厄介事増やすなよ…

「そう言う事で、正午から決行よ！」

「まずは作戦だろ？下手に追いかけて他人になられたら分からなくなるぞ？」

「それなら大丈夫。テレビ見てれば分かるわ。」

「怠けようつてのか？」

「また人助けするからよ！事件がある所にいけばいるわ！本当馬鹿ね！消したいわ！」

『速報です。○○銀行で強盗事件がありました。警察は周辺を…』

「これよ！この近くにいるはずよ。」

「でも遠いぞ？」

「天使が音速で飛べないとしても？」

音速…

直に触れたら一般人の俺は引き千切れるんじゃない…

「心配しないで。私達の周りの空気ごと飛ばせば千切れないわ、Gも軽減出来るし。」

なら安心だ。

「早速行くわよ。レオ！道案内宜しく！」

俺の手を掴む。

「うつす！餌は倍くれよ！」

…鳥が喋ってる。

この鳥はこつ言つ時に使うのか…

―銀行前―

「いないわね…」

「もうこの近くにはいないんじゃないか？」

「そうかも知…」

サクラが硬直する。

「どつし…」

俺も目を疑った。

コンビニのレジ打ちをしているサクラがいる。

「あれよね…?」

「あれだな…。」

そして誰もいない路地裏へ『鏡』を連れて行く。

「お前…何してんだ?」

「そんな事より、早く戻すわよ。」

すると、今まで話さなかった『鏡』が話し出す。

「まだ…だめ…」

そう言った途端に走り出す。

「後をつけて見ましょう。」

そうして尾行が始まった。

まず最初に行った場所は花屋。

桃色の薔薇を買う。

そして次に玩具屋。

一体何がしたいんだ? 暴走している訳でもないのに…

突然、サクラが言う。

「先回りするわよ。」

「どこに行くのか分かるのか？」

こんなにブラブラしてる奴の行動が…

「本当にここに来るんだろうな？」

病院。

「来たわ。」

本当に来た。

『鏡』は物陰に行くと、他の女性になる。

「行くわよ。」

後をつけると病室に入って行った。
どういう事なんだ？

病室の扉からこっそり中を見る。

花束と玩具を渡して戻って来た。

「もう…戻して良い…。」

「本当に良いんだな？」

そして俺は斬った。

「なあ？あれは一体何だったんだ？」

サクラは分かっていたから病院だと分かった。

「火事の被害にあった子供の所よ。亡くなってしまった母になって
慰めてあげたのよ。桃色の薔薇の花言葉は病気の回復。」

「何でわざわざ…」

「自分がいたのに助けられなかったから…でしょうね。レジ打ちは
治療費の為ね、花に仕込んだ。」

そんなわずかなお金で…

天使もそんな事を思っただな…。

「暴走にも種類があるようね。暴れたり助けたり、珠になったり…」

第八話 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217y/>

破壊系天使サクラが通ります。消されますよ？

2011年11月17日20時48分発行